

五月雨のパークアンドライド#

名暮 ゆう

どうして公園に来たんだっけ。

言い訳の一つや二つ、あったような気がするが、今や私の両手はビニール傘と紙袋で埋まっただけ、思い返す余地はなかった。

ここは、そこまで大きな公園ではない。どの方角からでも対向に歩いてみれば、一分も経たずに敷地外へと出ることができてしまう。中央に公衆トイレがあり、あとはその周辺に紫陽花が咲いているような、街中のありふれた公園の一つである。

見渡す限りに鈍色の雨雲が広がる空を、ビニール傘ごしに眺めてみる。雨粒が傘を覆い、ほとんどまともに楽しめない。雨粒を弾く音がやけに大きくなつた気がした。

梅雨時に決心したことが間違いだつたのかもしれない。両手を傘に添えたことで、紙袋がガサリと音を立てる。自然と中身に目がいった。その先を考えただけでも喉が締めつけられる。巻き舌になって唇がぎゅっと締まる。

……目を逸らした先には、紫陽花がいた。

青や紫で色づけられたそれらは、流星は梅雨の風

物詩と言ったところだろう、雨多し梅雨の風情を色や形で体現し、こうして降り注ぐ雨に打ちつけられても尚、強く逞しく咲いている。私とは大違いだ。私とは、大違いだ。

……ねえ、どうして君たちはそんなに前向きなの。

紫陽花に語りかけてみる。

彼らは梅雨風に吹かれてふわりと揺れた。途端に雨脚が強まって、それはより顕著となった。私には紫陽花が私の言葉を否定したように思えて、胸の奥がキュッと締めつけられた。

ふふ、突然話しかけてごめんね。怖かったかな。でも、大丈夫。私は何もしないから。

気を取り直して、中腰になって彼らに視線を合わせしてみる。

反応はあった。紫陽花の茎から伸びる一枚の葉が、大きく揺れた。おおっ、と思つて葉を捲ってみる。

……ガッカリした。

カタツムリが動き出したのに合わせて反応しただけだった。

咄嗟に舌に歯を立ててしまつて痛かったが、めげずに話しかけてみる。

私とは違つて、綺麗だね。

何か、秘訣とかあるの？

……奴らは気高い植物で、人間を見下しているのかも知れない。そう感じさせるほど、うんともすんとも言わない。

——馬鹿にしゃがつて。

気を利かせて話しかけてやったのに。

この仕打ちかよ。

貴方たちは私のことなんて何も知らない。私だつて、貴方たちのことは何一つ知らない。いつからこの地で花を咲かせているのか——梅雨頃なのは明白だが——私にまじまじと見つめられてどう感じしているのか、何一つとして知らない。

だから、言葉を交わそうと思つた。

対話をすれば、分かり合えるかもしれないと思つた。

普段なら、誰も私の話に耳を傾けてくれない。

けれど、君たちなら。

もしかしたら。

そう、思つたのに。

やっぱり、私の善意には応えてくれないの？

……ねえ。

どうしてそんなにまじまじと私を見つめるの。

何と問われていようと、私には微塵も理解できない。それでも理解してよ、そう訴えているような気もした。

——無理でしょ。

植物の分際で。

無性に腹が立って鷺掴みにしてみる。力加減が分からず、紫陽花の身体からいっぱいの雨粒が弾けて、私の顔まで飛んできた。……惨めな植物に汚された気がして、鷺掴みにした手を握り拳に変える。ガサガサ、ミチミチ。手がぎゅうぎゅうと音を立てている。

それから紙袋を振るい、紫陽花らを強打する。
どうだ、痛いか。

本能に任せて紙袋を左右に力いっぱい振るう。ふん、ふんッ。花弁はその度に周囲へ飛び散り、やがて花は茎からへし飛んでいった。はあ、はあ……。それからぐりぐりと、紫陽花を踏み潰してみた。既に十分湿きつたスニーカーだったが、執拗に踏み込んだからか、異物感のある染み込みが指先の体温を冷ましてゆく。

ふふっ、お似合いだね。

半ば地面に埋もれた紫陽花を眺めながら最初に出てきた感想は、それだった。少なくとも私からしてみれば、同情を抱くほどに汚らしい紫陽花が目の前に現れて、強かな笑みすらこぼれるほどだった。

……綺麗なんて、詭弁に決まってる。

多分、その価値観は、人間には必要のないものだと思う。だって私たちは、埃やゴミが粘着した汚らしいキャンバス。

人間ってそういうもんでしょ。
生きてるだけで世界を汚してゆく。
集団行動を基本とするのに、集団の中で惨めな人

間を指差して、袋叩きにする哀れな生物。
私だって何度も言われてきた。

身の程を弁えろ、お前なんて見る価値のない、醜い、実に。そう罵られながらスプレー缶を制服に噴射された。こっちの方がお似合いだよ。私が塗り替えてあげたんだよ感謝しなよ。あ、ありがとうございます……。人間ってそういうものだから。上には上がいて、下には下がいる。あんたみたいに醜い物は、上からの施しをただ待ってればいいんだよ。どうせ生きてるだけで汚いんだからさ。

ふふっ、そうだね。

そうだった——。

傘を閉じ、その先端を地面に突き立てる。心なしか、紫陽花の嬌声が耳をつんざいた。アリガトウゴザイマスって？ 馬鹿らしい。

雨粒に期待した。

私の身体を清めてくれるかもしれない。
助けを求めた。

これが最後のSOSだった。

けれど、無意味だった。汚らしい私が露呈するだけ。彼らの方が、余程。だから、私というキャンバスに敢えて描き足すとするなら、それは紫陽花にな

る。花は、何故だろう、そこに在るだけで彩りを与えてくれる——そんな気がして。

世界は依然として黒く厚い雲に覆われている。雨は止まない。一寸の光も見当たらない。希望はない。抜け目なく、私の身体を隅から隅へと濡らしてゆく。

ずぶ濡れになった髪はきつと痛むだろう。雨粒で透けたブラウスも汗ばんだスカートのベルトも、洗い流されたところで削ぎ落せはしないだろう。

紙袋から色落ちしたジャケットを取り出し、誰も見ていないからと大げさに羽織ってみる。

そしてもう一つ。

ジャケットで包んでいた包丁を、

そっと握ってみる。

今は不思議と——手に、馴染んでいた。

もう傘は要らない。

それは紫陽花に突き立てて、紙袋も投げ捨てた。

スニーカーにこびりついた泥をアスファルトに擦りつけ、紫陽花の方に身体を向ける。

甚雨（ひさめ）を受け入れる覚悟はできた。

後は別れを告げるだけ。

——さようなら。

次会う時は、隣で咲いてもいいかしら。

フフツ。